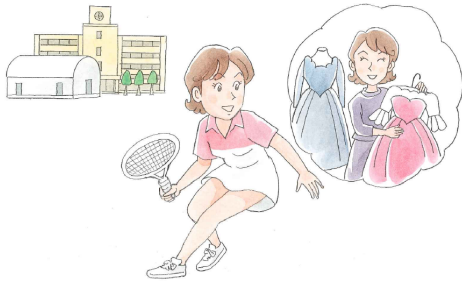


QOL向上を目指す専門職間連携教育用教材

重度障害者の 在宅復帰・住宅改修と生活の再設計

1



Aさんは、B市に住む21歳の女性で、身長1m60cm、体重48kgです。
市内の高校を卒業後、同じ市内にある大学に進学しました。大学ではテニス部に所属し、活動的な毎日を送り、友人も多く、将来は、服飾関係の仕事に就きたいと思っています。

2



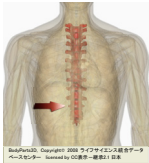
Aさんの家族は、両親と高校生の妹、祖父母の6人家族で、果樹栽培を家族で行う古くからの農家です。

3



Aさんは、大学3年生になって就活準備を始めた矢先、通学中に乗っていたバイクが大型ダンプカーと接触する事故に遭いました。

4



入院した急性期病院での診断は、脊髄損傷(T11)でした。見舞い客が大勢訪れましたが、本人は、あまり人に会いたくないと面会を拒むことがほとんどでした。両下肢機能全廃という障害を受け入れられずに悩み、ストレス性胃潰瘍を発症しましたが、投薬により症状は治まりました。

5



回復期リハビリテーション病院へ転院してからは、少しずつ気持ちの整理がついてきた様子で「家に帰りたい」「大学を卒業したい」という気持ちを家族、スタッフに伝えるようになりました。現在は、リハビリテーションにも、ようやく前向きに取り組み始めたところです。

6



下肢の機能が回復しないことを理解していますが、そのことを受け入れられない状態にあります。
精神的には、抑うつ状態にあったのですが、回復してきています。

7

■ 心身機能・身体構造 (Body Functions & Structures)
#両下肢麻痺

■ 活動 (Activities)
車椅子は操作可能だが、ベッドから車いすへの移乗等が一人ではできない。



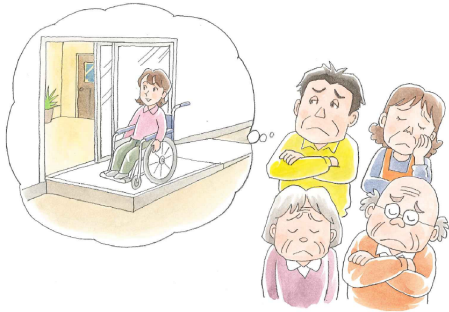
生活機能の評価は、表のようになっていました。

8



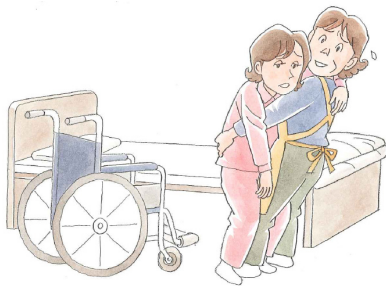
自宅に帰り、できれば大学に復学したい気持ちを持っていますが、自宅に帰ると家族に迷惑をかけてしまうという遠慮もあります。
このように、退院後の生活設計を考えたり、悩んだりしている状況にあるようです。

9



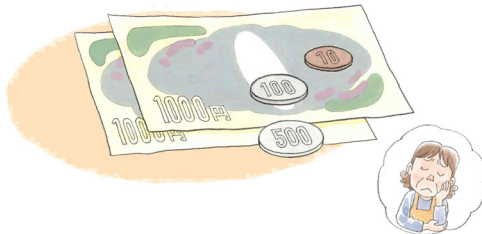
家族は、できるだけ本人の意向にそった生活をさせたいと考えていますが、住宅改修や自宅退院後の諸費用についての不安を抱えています。

10




自宅退院の場合、介護者の中心は母親になりますが、同居している祖父母も元気で協力的です。また、妹も自宅から通学できる大学に進学予定のため、当面の介護者は確保できます。
将来、両親が高齢になったときや、妹が家を出たときには、家族だけの介護者以外の別の対応が必要になりそうです。

11



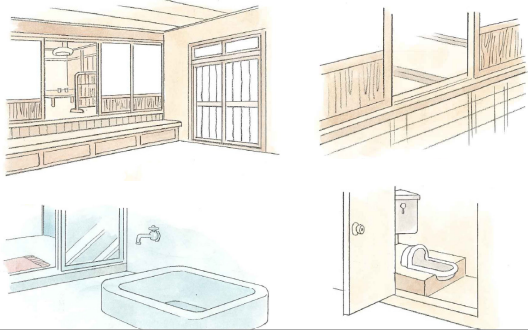
経済的に余裕がありません。妹の進学も控えていて、Aさんのために高額の出費をすることは困難なようです。

12



現在、まだ申請していませんが、身体障害者手帳と障害年金の申請が可能です。しかし、本人は申請をためらっています。

13



住宅は、B市郊外の住宅地に畑が散在している地域にあります。JRの駅が近くであり、B市中心部へのアクセスは良好です。家は古いため段差が多いのですが、廊下や居室の広さは、十分にあります。

14

QOL向上を目指す専門職間連携教育用教材

**重度障害者の
在宅復帰・住宅改修と生活の再設計**

制作著作 Copyright © 2011
「QOL向上を目指す専門職間連携教育用モジュール中心型カリキュラムの共同開発と実践」
(文部科学省 平成21年度 戦略的大学の連携支援事業採択事業)
新潟医療福祉大学・埼玉県立大学・札幌医科大学・首都大学東京・日本社会事業大学

原案 Portions Copyright © 2011
永野なおみ(県立広島大学)

15
